



ありがとう



霞月

君は母親を名前で呼んでいた
それが世間でいいことや悪いことや
そんなことはどうでもいい。

ただ、僕にとってそれは
いいことだったのかもしれない。

2LDKのこの部屋から
「ちあきちゃん」が居なくなった。

君と僕との2人暮らしが始まった。

君はたった3年4ヶ月で
僕が今でもなくしていないものを
失くしてしまった。

いや、僕が奪ったのかもしれない。

これから先きっと辛いこともあると思う。
今までもきっと寂しい日があったと思う。

だから、今日までの何でもない事を
楽しかった事を

書いていこうと思う。

買物は一緒に

僕は君と2人になって
いろいろな事を約束した。

その中の一つに
・買物は一緒にいく
というのがあった。

毎日仕事が終わって君を迎えに行く。
本当はその前に行きたかった。
でも、約束。
少しでも同じ時間を過ごすための。

君はいつも店に入ると
僕のビールを両手で抱きしめて
僕よりも先に持ってきてくれた。

活舌の悪い
「ぱぱさんのビール」
発泡酒を受け取り
「プレミアムやね」
毎日続くこの会話。
こんなに小さな事が
こんなに楽しいとは思わなかった。

夕食のメニューを決めるのは君

いつもとんでもないことを言い出す。

料理はできる。
もちろんクオリティは高くない。

君が選ぶ夕食は...
「お刺身」

目の前には50センチほどの魚。

切り身を持ってくるが許可が降りない。
どうしても目の前の”ツバス”が食べたいとのこと。
自信はないがやるしかない。

何とか刺身になった。
君もうれしそうに食べてくれた。

「おいしいね」

2人になって急に君が大人になった気がする。

ただたった2人の食卓に50センチのツバス。
このままだと明日も明後日もツバス...。
残りは醤油とみりんに漬けよう。

君は夕食のとき僕にビールを飲ませたがる。
理由は知っている。
隣に座って同じ格好をしてジュースが飲みたい。
そのために僕のビールを持ってきた後
僕を引っ張りジュースの前に連れていく。

ビールとジュースで乾杯

君は必ず

「おつかれでした」

と言ってくれる。

本当につかれた。

まさか魚を裁くとは思ってなかったから。

でも、君のおかげでいろんな事が出来るようになった。

ありがとう。

飲みにもいこうか

君との約束

「たまには2人で飲みにいこう。」

家の近くに居酒屋があった。

あまり広くはない

あまり綺麗でもない

そんな普通の居酒屋。

ビールとコーラで乾杯。

家では隣に座るのに

外で食べると向かい側に座りたがる。

家ではご飯をこぼすのに

外食すると綺麗に食べる。

串に刺さった焼き鳥がうまく食べれない

お店のおばちゃんが気を遣って

できた焼き鳥を爪楊枝にさして

作り直して出してくれる。

だからいつも案山子に行く。

ここにくると君はいつもよりも大人になる。

仲のいい友達と来たような

そんな不思議な感覚になる。

君は自分のコーラがなくなると

「ビールとコーラおかわり～」

いつも僕の方も頼んでくれる。

届いたビールを注いでくれる。

立ち上がって注いでくれる泡だらけになったビールが

こんなにおいしいとは知らなかった。

僕が君と同じくらいのころ

僕が注いだ泡だらけのビールを

父親が笑いながら飲んでるのを思い出した。

20年後、君も僕と同じ事を思うのかな
そう考えると今日の前で両手で
必死に瓶ビールを抱えてる姿が
おかしくて、かわいくて仕様がなかった。

2人で居酒屋に行った日の帰りは絶対にアイス。
外がどれだけ寒かろうが
たとえばその日雨だろうが
君はアイスを食べると言い出す。
24時間営業のスーパーでアイスとビールを買って
2人で歩いて帰る。

一人で歩くと10分の距離も
君と歩くと20分以上かかる。
歩くのが遅い上に寄り道が多い。
そのおかげで色々なものを見つける。
でも冬は寒いからまっすぐ帰ろう。

居酒屋つきあってくれてありがとう。

土日休み

それまで僕は月曜と火曜が休みだった。

仕事柄土日は休めない。

この仕事は続けられないと思い
事情を話して退職する事を伝えた。

しかし、会社は僕が本当に無理だと思うまで
土日休みでいいから残って欲しいと言ってくれた。

少しだけまだ君と2人になる前の話をしようと思う。

訪問販売の少しだけ怪しい会社で
僕は営業で入社した。
決していい会社ではなかったが
みんな仲がよかった。

サークルのような
部活のような
そんなところだった。

土日は稼ぎ時。
平日は寝てたりパチンコ行ったり家に帰ったり...
みんな好きな事をして勝手に過ごす会社だったが
土日は必死に働いた。

決して給料は安くはなかった。
きっと同じぐらいの歳の人の中では高い方だと思う。
その給料は土日だけで稼いでいる。
効率のいい仕事だった。

平日保育園に行く君とはほとんどすれ違いの生活。
それでも毎日お風呂と寝るのだけは僕と一緒にだった。

土日は休めない。

そんな中僕の休みは土日になった。

就業規則、雇用契約

そんなものよりも都合を優先させる
と言えば聞こえがいいが、
そういういい加減な会社だった。

その居心地のいい

いい加減な

仲間思いの怪しい会社のおかげで
僕は君と毎日を過ごすことが出来た。

無理をして僕達に土日休みをくれたマネージャー
ありがとう。

そんな経緯で手に入れた土日休み。

その休みの日の話は次の機会に話そうと思う。

休みの日には

休みの日は朝が早い

僕にも記憶がある。

なぜか休日は早く目が覚める

早く起きる意味なんて何も無いのに

ただ、何か楽しそうで目が覚める。

君もたぶんそうなんだろう

そして僕を起こしにくる...

僕をお起こす時の君の言葉は決まって

「今日はどこ行くの？」

いや、どこにも行く予定は無い

用事も無い。

できることなら昼まで寝ていたい...

でも君は何処かに行きたがる。

そんな時は

いつも近所のショッピングセンターへ行く

ただ店内を散歩する

何も買わない

特に何も見るものも無い

ただ散歩する

そしてお腹が空いたら

二人でラーメンを食べに行く

ここでは珍しい豚骨ラーメン

二人で1杯

1杯目を二人で分ける

替玉も二人で分ける

ジュースも二人で分ける

特別美味しいわけでも無いラーメンが
君とならすごく美味しい
博多の有名店より
熊本の有名店より
三重で食べるそこそこのラーメンが
今は世界で一番美味しいとおもう

君をいつか博多のあのお店に
連れて行ってあげたいとおもう
喜んでくれるかな...

でもあの日のラーメンは特別だったよ

ありがとう

温泉

始めて2人で温泉に行った話をしようと思う。

小さなころから君はお風呂が好きだった。
いつも一緒にお風呂に入ってた。
だから、いつか温泉に連れて行ってあげたかった。

休日、少し寒い日。
その日も君は
「今日はどこに行くの？」
と僕を起こしてきた。

いつも予定はない。
でも、その日はちょっと考えてたことがあった。

「今日温泉いこうか」
君は温泉がなにかよく分かっていない。
「大きなお風呂はいろいろか」
家の風呂以外を知らない君が
理解するのは無理だった。
ただ、風呂に入る事だけは理解できたみたいで
満面の笑みで
「うん」
と答えてくれた。

君の着替えとタオルを用意し、
車に積み込み出発する

目指すは道の駅飯高
数日前にTVで見た。
遠くもないし、近すぎもしない。
ドライブにもちょうどいい距離。

君のジュースを買い、
2人で何でもない話をしながら走る。

しばらくすると君の返事が遅くなる。

もうしばらくすると、君は寝ている。

そしてなぜか、目的地に着くころに目を覚ます。

君は始めてきた場所にご機嫌で後ろを走ってくる。
とりあえずまっすぐ温泉に向かう。

2人で服を脱ぎ、
2人でぐしゃぐしゃに服を入れる。

湯気でいっぱい温泉に行き、
シャワーで体を洗う。
まだ、大きなお風呂は見えない。

そして君を連れて浴槽へと向かう。

君は始めてみる大きな風呂を
「大きなプール」
と言った。

確かに、保育園のプールよりも大きい。
広すぎて風呂という感覚がないのかもしれない。

2人で中に入ると、君は少し怖がっていた。
僕をギュッと掴んだまま離れなかった。

広すぎて少し不安だったのかもしれない。
結局ずっと隣にいた。
ただ、少しずつ馴れてきて
「温かいね」
「きもちいいね」
と言ってくれた。

初めての温泉はちょっと緊張だったかもしれない。
でも、君はそれからずっと温泉が大好き。

今でも

「温泉行こ」

という君の最初の温泉の話。

素敵な思い出をありがとう。

最後の話

最後の話をしようと思う。

君と僕と2人での生活の最後の日の話を...

君はこの街を離れる事を理解しないまま出発した。
ただのドライブと思っていたのかもしれない。

12月の末...。
雪の降る中大阪まで走る。

普段は後部座席につけていたチャイルドシートを
今日だけは助手席につける。

「後ろは寂しいやろ」
全部君のせいにしたけど
本当は僕が寂しかった。

嫌なこともあった。
辛いこともあった。
でも、君の生まれたこの街を離れるのは
本当は寂しかった。

君は僕の隣でフワフワの毛布を着て
雪に喜んでいる。
本当に楽しそうだった。

クルマに積めるだけの荷物を積み
君の足元にまで荷物が置いてある。
その荷物に足を置き快適そうにジュースを飲んでいる。
普段は僕の専用のドリンクホルダーも
今日は君に奪われた。

君はしばらくするとお腹が空いたと言い出す。
「パン食べたい」
こっそり用意したパンを渡す。

「おかし食べたい」
今度はチョコレートを渡す。

君はドライブとパンとチョコレートとジュース。
好きなものをすべて手に入れてご機嫌だった。

3時間程で大阪につく。
南港のフェリー乗り場。
本当は高速で帰った方が安かったけど
君に少しでも楽しんでもらおうと思って
ちょっと贅沢してみた。

初めてのるフェリー。
これは僕も初めて。
君がいなかったら心細かったと思う。
2人でチケットを買いに行き、
クルマに戻り順番を待つ。
待ってる間君は楽しそうに歌ってたね。

フェリーに乗り込み
まず部屋に向かう。
たいしてなにもない荷物を置き
2人でご飯を食べにいく。
船のレストランで食べるご飯はちょっとおいしく感じる。

ご飯を食べたらお風呂に入る。
君の好きな大きなお風呂だった。
君はまたご機嫌。

後は寝るだけ。

折角だからとビールとジュースで乾杯。
窓から海を見ながら少し話をする。
君は泣きそうな顔の僕に
「大丈夫だよ」
と言ってくれた。

これで本当に寝るだけ。

いつも一緒に寝てたけど
今日のベッドは少し小さい。
ぴったりくっついてると暖かい。

次に起きたら九州。

朝5時半。
朝からシャワーを浴びたくて
ちょっとだけ早めに起きた。
君は気持ち良さそうに寝ている。
そっとシャワーを浴びに行く。

戻ってくると君はすぐに目を覚ました。
「ぱぱさんおはよ。おなかすいたよ。」
一緒に売店へ行く。
おにぎりを1つ買いクルマへ行く。

クルマに乗り15分ほど待つと到着。
久しぶりに来る九州。

少しより道をして
古賀インターから高速に乗る。
太宰府からは走りなれた道。
後はなにもない。
君も昨日はしゃいだせいか
今日はおとなしい。

広川SAでちょっと休憩。
2人でちょっとおやつを食べて出発。

この旅ももうすぐ終わり。
2人の生活ももうすぐ終わり。

君は覚えていてくれるかな。
2人で過ごした時間を。

2人で笑ったいろいろな出来事を。

最後に行った2人でのこの旅を。

ありがとう、よっしー。

本当にありがとう。